
私の世界が変わっていく

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の世界が変わっていく

【NZコード】

N1255E

【作者名】

シロクロ

【あらすじ】

私は外の世界を眺めながらあの人を待つていて。あの人は私の全てで、私はあの人があ好きだ。あ、あの人来たみたい。足音がするもの。

窓から見える景色はいつも同じ。ただ色が変わったり雨や雪がふる以外は、いつも同じ。

そんなつまんない景色が、だけど私にとって唯一の生の外界。めいっぱい開けた窓からくる風とか、花の匂いとか、雨の匂いとか、入りこんでくる雪とか、それが私の知ってる外の全部。背伸びをしてギリギリ私の目が外を見れる位置にある窓は、30センチも開かないただの換気用。

外は『やま』と言つ緑の盛り上がりと、その窓みに白とか小さいツブツブのある場所だ。

あのツブツブは『まち』と言つてたくさんの人間がいるらしい。そして上には『そら』と言つ青いのが広がつて白いふわふわした美味しそうなのが流れてる。あれはたしか… そう『くも』だ。

『くも』が泣いて雨をふらしたり雪をふらしたりするらしく、風は『そら』が呼吸してできるらしく。

外が暗くなつたり明るくなつたりするのは『たいよう』とやらが出てたり入つたりするかららしいけど、私の部屋からはたいようは見えないからどうでもいい。

私はあの人のがいなくて暇な時は大抵外を見る。緑が赤くなつたりするし、いろんな匂いがするし、そらは色が何度も変わるから、つまらないけど飽きたりはしない。

「『』飯だよ」

ぼーっとしてるとあの人が来た。

私は背伸びを止めてクッショוןに慌てて座る。

あの人は私が外を見るのをあまりよく思つてない。どうやら外に出たがるんじやないかと危惧してるらしいが、それは無駄な心配だ。私はこの部屋から出たことがないけど、不満に思つたことは一度もない。

外に興味がないわけじやないけど、あの人が嫌なら私はここからでない。

あの人が思つてる以上に私はあの人気が好きだ。

「おはよう」

「おはよう、昨日はよく眠れた？ 恐い夢は見なかつた？」

あの人はそう言つて微笑みながら鉄格子にかかつてる鍵を開けて私の部屋に入つてくる。

この鉄格子から私の部屋に入つてくるのは世界でただ一人この人だけ。

時々、本当に時々鉄格子の向こうにこの人以外の人間がくるけど、私はそんな時は口を閉じるのだ。

この人は私に何でも教えてくれる。だから私は知つてゐる。

世界にいる人間は悪い人ばかりで、この人はそんな人間から私を守つてゐるのだ。

それだけじやない。外は寒くなつたり暑くなつたりするし、お腹が減つたりして苦しいこともたくさんあるらしい。

でもこの人は私を守つてゐるのだ。全てから私を守つてくれて私に何でも教えてくれる人。

だから私はここにいる。

ずっとずっとここの人と一緒にいるのだ。

「見なかつたよ。でもね、あなたがいなか寂しかつたの」

「ごめんね、昨日は少し忙しかつたんだ」

「悪者をやつつけてたの?」

「? どうして?」

「だつて、あなたはいつも私のために悪者をやつつけてくれてるもの」

そう言つうとあの人はにこり笑つてそうだよと言つた。

「私は君を愛しているからね。君のためなら何だつてできるんだ。愛してゐよベティ」

この人は名前をルースと言つんだけど私は名前を呼んだことがないし、この人も滅多に名前で私を呼ばない。

でも愛してゐる後には必ずベティと言つ。私は始め、『愛してゐよベティ』という言葉かと思つたけど、このベティとは私の名前らしい。

『くも』や『そら』、『じ飯』、全部全部に区別のため名前がついてるらしいけど、私にはよく名前がよく分からない。だつてどう見ても別のものだと分かるのに、どうして名前をつける必要があるのよ? それに私にとつて唯一の人間はこの人だけだから区別なんて必要なない。

あなたと呼べば返事をしてくれるから、私は名前を大事とは思わない。

「私も愛してゐるわルース」

でも今日は何となくそう言つた。

そもそも愛してゐる意味が分からぬけど(特別好きつて意味らし

いけど、この人は私にとつて唯一だからわざわざ特別な言葉を使う
までもなく特別だ）この人は私に時々使う言葉だから、いい意味な
んだと思う。

そうしたらその人はとても嬉しそうにありがとうと何度も言って、
いつも一日一粒のお菓子を今日は一粒くれた。

「ありがとう。私、ルースが大好きよ」

お礼を言うとこの人はもつと喜んだ。

それで気がついた、この人は『ルース』という言葉がとても好きな
のだ。
だから私はたくさんルースと言つことにした。『あなた』のかわり
に『ルース』と言つと、あの人はとても喜んだ。

「愛してるわルース」

そう言うとあの人は本当に嬉しそうだった。意味は分からないうけど、
あの人が喜んでるから私もなんだか嬉しかった。

外の世界の色が変わつて、気がつくと私は背伸びなんかしなくとも
外が見えるようになつた。
そしてようやく私は気付いたのだけど私とあの人は違う体をしてい
る。

あの人だけじゃなくて、たまに鉄格子前にやつてきて何かを言つて

いる人間たちとも私は違うようだ。

大きくなれば同じになると思つたけど、違いは大きくなるだけだつた。

たとえば胸、私の胸はだんだん膨らんだ。あの人の胸に手を這わしても、硬くしつかりしていたのに私には一つの柔らかい膨らみがある。

たとえば声、私の声はあの人や他の人間より高くて、普通に話しても部屋どころか鉄格子の向こうまで響いた。

たとえば身長、伸びたのにあの人にはまだ顔をあげないと目が合わない。

たとえば……きりがないから止めておく。これ以上私の異端をあげたところで意味はない。

それに私が異端だうとあの人は私に優しいからそれでいいことにする。

あと最近氣付いたけど、どうやらあの人は病氣らしい。

夜に隣で寝てる日に、たまたま目をさましてあの人視線をやると、股から何かを生やしていた。

そしてあの人は私の体に顔を寄せた体勢のまま苦しそうにそれをこすつていた。

たぶんあの人は病氣で、股から何かが生えていて苦しんでるのだ。可哀想だけど、あの人は私に知られないようにしてゐみたいだから、私は知らないふりをする。

「愛してるわルース

「ベティ、僕も愛してるよ。大好きだ。君のためなら何でもするよ。ベティ、ずっと側にいてくれ」

私があの人をルースと呼ぶのと同じように当たり前にあの人も私をベティと呼びだしだ。

『あなた』を使うことはなくなつて、けど私とあの人は変わらない。私は大きくなつたけど、あの人は病気になつたけど、あの人は私は優しい今まで、私はあの人が好きで、私は外に出たいと思わなかつた。

けど、あの夜を境に何かが変わつた。

「はあ、はあ」

何度か眠つたふりをしたまま薄目で観察して分かつたのだけど、彼は私の体に触れながらそれをこすつていて、そして最後はたくさん白いものをだす。

あれはたしか「うみ」だ。

以前、私がフォークを腕に刺して（その時まで私は痛いということを知らなくて、私の体が美味しいのか食べてみようとしたのだ。痛くてそれどころではなくなつたけど）血が止まつてからしばらくして腕がじゅくじゅくになつてしまつた時に、痛くても『うみ』を出せば治るとあの人は言つた。

あの人があつたことはいつも正しい。だからあの人は毎日私に内緒で病気を治してゐるんだとすぐに分かつた。

でもそれはあんなにうみをだしても小さくなるだけで次の夜にみるとまた大きくなつてうみをだしてた。

きつとあの人はとても重い病気なのだ。

あんまりにもあの人があの人が可哀想で、私は寝たふりをしてゐるのも忘れて泣いてしまつた。

泣くのはあの人があの人が嫌がるからいけないことなのに我慢ができないなかつ

た。

あの人は驚いて何かを言おうとしたから、私は分かつてゐるのかわりにあの人の病氣のそこをそつと撫でてあげた。

あの人は大きな声で何度もベティと叫んだ。ベティは私の名前と思つてたけど、別に私に何かを言いたいわけでなさそつなので私は勘違いをしてたらしい。

私は泣きながらも妙に冷静にそんなことを考えていた。
しばらくすると彼はたくさん『うみ』をだした。だけど今日は不思議なことに彼の股のそれは大きなままだった。

「『めんなさい、『めんなさいルース』

きつとこの人の病氣は前より重くなつて、もつともつとたくさんうみを出さないと治まりすらしないのだ。

どうして氣づいてあげられなかつたのか。この人はこんなに私に優しいのに、私は愛してゐと言つてしかこの人を喜ばせてはあげられなかつた。

だけどあの人は首を横にふる。

「いいんだよ。それよりベティ、知つてたの？」

「…うん、『めんなさい』

「いや…僕を、嫌いになつてないかい」

どうしてそんなことを言つのか私にはわからなかつた。

あの人は私に辛いのを黙つて毎日私に笑つて優しくしてくれてたのに、どうして嫌いになれると言つのか。

そういえば、病氣が始まつたころからあの人は前よりずっと優しくしてた気がする。

前より私の頭を撫でてくれてそれだけじゃなく肩も背中も優しく撫でてくれるし

前より私に触れて抱っこして抱きしめてくれるし

前より私を背中に乗せてお馬さんじっこをしてくれるし

プロレスじっこやくすぐり勝負もよくしてくれるようになつてた。

けど、本当は苦しかったんだ。

私は謝ることしかできなかつた。

するとあの人は優しく、舐めてくれるかい?と言つた。

私とこの人はとても仲がいいからそれだけで全てにがんが言つた。

つまり、怪我は舐めれば早く治るから、私が舐めて治療に協力すれば許してくれると言つたのだ。

なんて優しいのか、私は改めてこの人と一緒にいればずっと笑つていれるだらうと思つた。

「うん、分かったわ」

私は病氣でうみ出たけれど私の口に入つてしまい、私は慌てて吐こうとした。

あの人はとてもとても苦しそうでまたベティベティと叫んだ。すぐにつみは出たけれど私の口に入つてしまい、私は慌てて吐こうとした。

なのにあの人は私に飲めと言つ。部屋が汚れるからと言われ、私は初めてこの人が嫌いと思つた。

私が嫌なことを強要するなんて酷い人間だ。

けど、すぐに私の頭を撫でて何度もお礼を言つたから、まあいいか

と思つて許してあげる」とした。

そして、朝になつてあの人は起きた私に微笑み挨拶をする。

「おはようつべティ」

そこまでは同じだつた。なのに、この朝はいつもと違つたことをした。

私の唇に、自分の唇を押し付けてきたのだ。

私はあんまりに驚いたから、ぼけつとの人を見た。
唇を離したあの人は私にどうしたのと不思議そうに言つた。
私はびっくりするのを止めて、の人を睨んだ。

「どうしてこんなことするの？」

「え？」

気持悪いわけではなかつたし別に嫌ではなかつた。
昨日の治療よりはずつと気にならないはずだ。
なのにどうしてか、とても恥ずかしいような気がして、私はやめて
と言つた。

「「」ことやめて。一度としないで」

最近あの人裸を見られるのを恥ずかしいと感じたけど、今のは
それよりずっと恥ずかしかつたから、だから私は殊更嫌そうな顔を

してそう言った。

「そ…う、『じめん。』『じめんよ。僕が悪かった。もう一度としない。
だから許してくれ
「……うん」

恥ずかしいのに、何でかそんなに嫌じやなくてむしろちょっと気持
良かつたのは自分でも不思議で、別にもう一回くらこしてもいいか
なと思つたけど、

でも
あの人泣き声で言つから、今更言ひ直すのもどうかと思つてた
だ同意した。

「『じめんね、本当にむづしないから』

治療をもう一度してあげるから、今を何なのか教えて欲しかつた
けど、話を蒸し返すのも駄目っぽいからやめた。

その日から、あの人は私をベティと呼ばなくなつた。
何故か名前を変えようと声に出して、私をキティと呼ぶようになった。
た。

そしてあの人は少しずつ変わって行つた。

まず、私がどんなに寂しいと言つても夜は私の部屋から出でていって
一緒に寝るのを止めた。

そして私にお菓子の袋を渡して『好きな時に好きなように食べなさ

い』と言つた。

そして私に触れる回数が減つた。

そして、私の髪が長くて床に引きずるようにならむには、あの人
は部屋に入ることすらなくなつた。

「ルース、ルース」

「どうしたのキティ」

「どうして私をキティと呼ぶの？」

「…君がキティだからだよ」

「どうして私に触れないの？」

「…君が嫌がるからだ」

「寂しいよ。ルースがいなきや嫌よ」

「……僕は君とずっと一緒にいるよ。君の田の前にいるよ」

私は鉄格子の隙間から手をだして伸ばすけど、あの人には届かない。

「ルース…寂しいよ」

「…」めんね」

私は泣いた。

大きな大きな声で、たくさんたくさん泣いた。

なのにルースは何も言わないで、困ったような笑みを浮かべて、何
処かに行つてしまつた。

私は泣いた。

前は私が泣けばすぐに私を抱きしめてくれたのに、今は私の前に来てさえくれない。

私は泣いた。

恥ずかしいからとあの人を拒むべきではなかつた。
あの人は私の世界の全てで、私の全てをあの人は守つてくれてたのに、私はあの人には僕を言つたのだ。
それは、許されないことだつたのに。

外が明るくても暗くても、構わずに私は泣き続けた。

そうしてしばらぐすると、足音がして私は疲れてたのもあつて泣くのを止めた。

足音が段々近づいてきた。

あの人があつれてくれた！

私は嬉しくて「飯を食べてないからお腹が空いて目眩がしたけど、それでも来ててくれたのが嬉しいから私は立ち上がりつて鉄格子に飛びついた。

「ルース！ ルース！」

足音が近づいて……？

足音がたくさんするのは気のせいだろうか？

もしかしてルースではなくて悪者がきたのだろうか。

私は恐かったけど、でもルースだつたら氣を悪くするかも知れないから鉄格子の前で待つことにした。

キイと久しぶりに聞く音がして、私の部屋の鉄格子に通じる廊下の奥のドアが開いた。

そこにはルースもいた。

悪者もいた。たぶん、絶対悪者だ。だつてルースが泣きそうな顔をしているから。

「ルースを離して、ルース、ルース愛してる。悪者なんかやっつけ。笑つて。もう我が儘なんか言わないから。ごめんなさいルース。もう一度とあんなこと言わないから許して。私と一緒にいて。ルース、愛してるの」

たくさんたくさん愛してると言つて私はまた涙を流した。なのにルースは悪者に手を捕まれたまま、抵抗もせずに首を横にふる。

「キティ…今まで」めんね

「どうして謝るの？ 嫌よお願い、私から離れないで」

「「めんね。君を今まで閉じ込めて」

「外に行きたいなんて思つてないわ。あなたが側にいればそれだけでいいの」

「「めんね」

謝つて欲しくない。

私は泣きながら悪者に怒鳴る。

「ルースを離して！ 悪者！ 悪者なんか、大嫌い！ どうか行つ
ちやえ！」

悪者たちは何故か困つた顔をしている。

「…早く鍵を開けなさい」

悪者に命令されてルースは鍵を開ける。
部屋から出れるのに、出てルースを助けられるかも知れないのに、
体が動かない。

恐い。

外に出るのが恐い。

外は恐いことがたくさんあるとある人が、ルースが言つてたから。

「君、出ても大丈夫だよ。我々は君を助けに来たんだ」
「どうして、ルースに酷いことするの？」

私が言つと悪者は戸惑つたように口々に言つ。

「こいつは悪いヤツなんだ」
「君を閉じ込めてた犯人なんだ」
「我々は君を助けに来たんだ」

私は涙を拭いながら言つ。

「お願いだから酷い」としないで。ルースは優しい人なの。ルース
は私を愛してくれてるの」

「……じゃあどうして君はそこから出てこいつを助けないんだ？」

「え」

「だつて、こいつが大切なんだろ？」

「……だ、て……だつて……」

外はとても恐いから、出たら駄目だつて。

ルースが守るから出ちゃ駄目だつて。

「ルースが、出たら駄目つて」

「ほら、君を閉じ込めてた」

「……ちが、うもん。ルースは私を守つてたんだもん」

違うもん。ルースは、ルースは優しいから。

「違わないよ」

「外は恐いから、出たくないの」

「大丈夫。我々がいるから何も危険じやないよ。おい、鍵を開けたら用済みだ。連行しろ」

「はつ」

ルースは連れて行かれる。助けなきゃ。でも恐い。恐いよルース。

「ルース、助けてルース！」

ルースは振り向いた。

「大丈夫。外は、本当はそんなに怖くないから。君に側にいてほし
いから嘘をついただけだよ」

気がついたら私は、鉄格子の向こうに出ていた。

「ルース」

ルースは手を引かれながらにっこり笑った。

「よく頑張ったね。僕がいなくても大丈夫。君を守ってくれる人は別にいるから」

「ルース！！」

私は、生まれて初めて嘘を言つ。

「大丈夫じゃない！ 外は恐いよ！ ルースがいなきや外になんか行けないよ！」

本当は、外はもう恐くなつた。

だってルースが恐くないと言つたから。ルースはいつも本当のことしか言わない。

だから外はもう恐くなくて、むしろ興味があつたけど、でもルースがいてくれるなら外に出れなくてもいいとは本気で思つ。

嘘はいけないと知つてたけど、私はルースに側にいてほしいから嘘をついた。

なのにルースは

「ごめん」

と言つて連れられて行つた。

私は追いかけようとしたけど、お腹が減りすぎて力が入らなくて、倒れてしまった。

「…あ…」

目をさますと知らない場所にいた。

私の部屋はルースと私が十人くらい一緒に寝ても大丈夫な大きさだつたけど、ここはもつと大きい部屋だった。

ルースはどこに行つたんだろ？ 窓に近寄ると大きくて外に床がつきでていた。

おつかなびつくり出てみると、私が普段見てた外とは違つて三角や四角の色とりどりな世界だった。

「…カレン？」

その時、後ろから音がして私は慌ててカーテンに隠れた。

「カレン、起き…カレン！？ どうしましょ？！ カレン！ 何処に行つたの！？」

私を探しにきた悪者かと思つたけど、カレンでのを探してゐる人間と知つて私は安心した。

そしてあれ？と思つた。

あの人、胸が膨らんでる。

私と同じ異端だ。

何だか嬉しくなつて私はその人間に声をかけることにする。

「ねえ、ここは何処?」

「カレン! ああ良かつた、まだどこかにさらわれたかと思ったわ」

「え?」

人間は私を抱きしめて泣き出した。

人間はルースより柔らかくて何だかいい匂いがした。

「あ、あなた誰?」

「私はベティ、あなたの母よ」

「はは?」

何だろう。食べ物?

「ああ、常識も知らないのよね。可哀想なカレン。私は、あなたの家族なの」

「かぞく?」

「ああ、だからつまり、私はあなたを愛してるのよ」

「? 私、あなたのことが知らないよ」

「私は知ってるの。これからは私がカレンを守つてあげるからね」

どうして私をカレンと呼ぶのか、どうして前の私の名前と同じなのか。

知らないことはたくさんあって、聞きたいこともあつたけど、何だからこの人間の匂いがあんまりにいい匂いだから、私はまた眠ってしまった。

今日、私の娘が返ってきた。

字は間違っていない。

私の娘は生まれてすぐに誘拐されたのだ。18年も前の話だ。

犯人は私が結婚する少し前に告白してきた人でよくは知らない。娘は牢に閉じ込められていて、犯人ととても仲がよく育てられたらしい。

汚らわしい。娘に何をするつもりだったのか。何を考えているのか。だけどもういい。娘が返ってきたのだから。

「おかえりなさい、カレン」

これからたくさん教えてあげればいい。

私は腕の中の娘を撫でた。若い時の私にとてもそつくりだった。

返つてこれたのは娘の泣き言をたまたま聞いた獵師さんの通報らしい。その人にはたくさん報酬をあげるよう手配しておいた。

泣くほど辛い目にあつたのに犯人を愛してると娘は言つたらしい。小さい時からすりこまれたのだから無理はない。

私が、これからしつかり本当のこと教えなければならない。

「カレン…」

あなたを、幸せにしてみせるわ。

今度こそ、あなたを離さない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1255e/>

私の世界が変わっていく

2010年10月10日01時34分発行